

河川景観のモニタージュ写真を 用いた住民の水辺意識調査

長崎大学工学部 学生員 ○川端浩二
長崎大学大学院 学生員 坂下智慎
長崎大学工学部 正 員 野口正人

1. はじめに

近年、人々の関心は折からのウォーター・フロント開発とも関連して河川環境整備へと向けられてきた。これに伴い、河川環境整備を進める上で、住民の意識や景観等を考慮することが不可欠になってきた。もちろん、事業を進めるにあたって、治水面への配慮を怠ってはならないのは当然のことであるが、人々に親しまれる水辺を形成するためには、同時に住民の意識を十分に把握した施策が必要である。¹⁾

本論では、人々が河川に接する目的や頻度を調査し、併せて、河川景観についてもモニタージュ写真を用いて、人々がどのような河川の実現を期待しているかを調べた。以下にその概要と結果について述べる。

2. アンケート概要

前述されたように、好ましい河川環境を整備していくためには、河川に対する住民の関心・理解がなくてはならない。我々の研究室では、平成2年11月17日、長崎市の繁華街：浜の町アーケードにおいて、「水辺に何を期待されますか？」と題したアンケート調査を実施し、長崎市民の水辺意識について調べた。当日は、長崎市での「土木の日」の催しが行われていた日でもあり、繁華街の真中であるということも手伝って、回答総数は400を超えた。アンケートでは、河川に接する目的、頻度や河川に対するイメージ・期待について尋ねるとともに、モニタージュ写真を用いて各人の好みについても問うた。後者に関して具体的に述べれば、都市型の河川、郊外型の河川といえる2つの写真群を設定し、各々について「護岸を」自然的なもの”、”人工的なもの”、…と7種類に変化させ、パネル表示されたそれぞれの写真群から、最も好ましい写真と好ましくない写真を1枚ずつ挙げて貰った。このように写真を用いた調査は、人々にとって実際に近い形で河川の状態をイメージでき、興味深く回答できたようである。なお、写真1は都市型河川の原形としたものであり、写真2、3がそれを変化させたものである。

3. アンケート結果

回答者の総数は405人であった。その内訳は、男性169人(41.7%)、女性228人(56.3%)であった。また、年齢別では10代～70代までの幅広い年齢層で回答が得られた(表-2 参照)。河川に接する目的としては、表-1に見られるように、散歩、休息が圧倒的に多かった。回答者の多くが長崎市民であり、接する河川名についても長崎市内を流れる浦上川、中島川が多くあげられていたことを考えると、人々がこれらの河川に対して親近感をもっていることが分かる。また、表-2に示された河川に接する割合・年齢の関係からは、若い世代で、その頻度が月に数回程度であるのに対して、中年世代以降においては、週に数回程度



写真1



写真2



写真3

となり比較的頻繁に河川に赴いているという傾向が窺えた。河川に対するイメージ・期待の項目で特に目立った傾向は、自然を残してほしい、憩いの場であってほしい、きれいな河川であってほしい、というような回答が多かったことである。

次に、多変量解析の一つである数量化理論Ⅲ類²⁾を用いて、モニタージュ写真に対する回答結果について解析した。モニタージュ写真の内から選ばれた好ましい写真をカテゴリとして与えた。その結果が図-1である。この図の分布に従い、モニタージュ写真を並べてみると、Ⅰ. 自然的が残る河川景観、Ⅱ. ある程度緑を残して整備された河川景観、Ⅲ. コンクリートで人工的に整備された河川景観、というように大きく3つのグループに分けることができた。この中でⅠ、Ⅱのグループについて

は、該当する個体数量も多いが、Ⅲのグループに該当する個体数量

表-2 年齢・頻度組合せ

	年 齢								
	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	合 計
1.ほとんど毎日	13	18	12	29	18	18	7	1	114 (28.9%)
2.週に3,4回程度	0	2	4	6	7	15	5	1	40 (10.1%)
3.週に1回程度	1	13	9	11	15	25	2	0	78 (19.2%)
4.月に1,2回程度	8	20	9	4	9	13	4	0	67 (16.9%)
5.年に数回程度	6	22	10	7	11	4	0	0	60 (15.2%)
6.ほとんど行かない	6	13	4	6	1	9	0	0	39 (9.8%)
合 計	34	86	48	83	61	84	18	2	396
	(8.6%)	(21.7%)	(12.1%)	(15.9%)	(15.4%)	(21.2%)	(4.5%)	(0.5%)	

は少なかった。次に好ましくない写真をカテゴリとして与え解析したが、その結果が図-2に示されている。この図でも上と同様に3つのグループに分けることができた。Ⅲのグループに該当する個体数量が最も多く、前述された結果とも矛盾しないものである。

4. 結論

上述の結果より、人々に親しまれる河川景観はⅠ、Ⅱのグループのようにある程度自然を残して整備されたものであり、コンクリートなどで固められた人工的な河川整備はあまり好まれていないことは明かである。このことは河川に対するイメージ・期待の項目で多く得られた結果と深く関係していると思われる。また、水質に関する意見も多く、きれいで美しい河川を強く望んでいることが推察される。

真の河川環境整備は、単に見掛け上の整備に終始することなく、水質改善や周辺の景観との調和といった全体的展望のもとで、河川環境整備を実施されることが望ましいといえる。

<参考文献>

- 1) 野口正人・坂下智慎(1990):住民の水意識を考慮した河川環境整備,水工学論文集,Vol.34,pp.49-54
- 2) 田中豊・垂水共之・脇本和昌(1984):パソコン統計解析ハンドブックⅡ 多変量解析編,共立出版

表-1 河川に接する目的 (複数回答:可)

1. 休息	167 (19.7%)
2. 散歩	240 (28.3%)
3. ジョギング	16 (1.9%)
4. サイクリング	10 (1.2%)
5. トライア	64 (7.5%)
6. 釣り	37 (4.4%)
7. 水泳	15 (1.8%)
8. キャンプ	24 (2.8%)
9. 観光	68 (8.0%)
10. ハート・ウォーキング	6 (0.7%)
11. 花火	46 (5.4%)
12. お花見	36 (4.2%)
13. 各種イベント	21 (2.5%)
14. 通勤・通学・買物などの通り道	80 (9.4%)
15. その他	13 (1.5%)
無回答	5 (0.6%)

回答総数=848

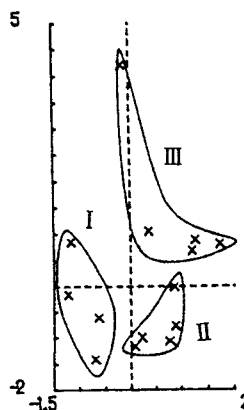


図-1

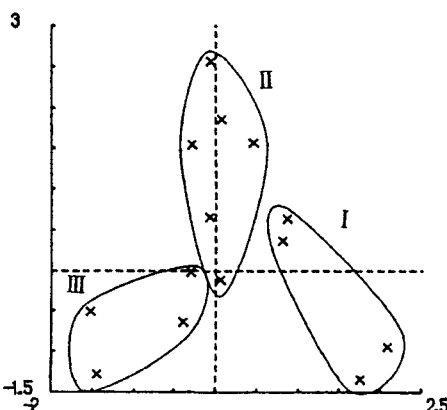


図-2